

目的： 幼児の分節性発達が発達加速現象（Acceleration）の下位過程のひとつである前傾化の表現として理解されるか否かを確かめようとする。あわせて、分節性発達が加速現象の他の下位過程である勾配現象としても表現されるものであるか否かを確かめるため幼稚園児と保育園児の比較を行なった。

方法： 豊中市、枚方市、八幡市の幼稚園児に交互にケルン・甲テストを実施した。実施期間は昭和50年より55年の6年間、毎年5月10日前後であった。さらに身長、体重の計測、家庭環境調査を行ない、各園の担任教諭に心理—社会的成熟調査票の記入を依頼した。また56年度は八幡市、堺市の3保育園と八幡市の1幼稚園において、同様のテストおよび調査を施行した。

結果： (1) 分節性の発達に関しては、完全分節(A)の初発年令が年次的に前傾を示している。

(2) C、C'からA段階への移行が年次的に低年令の極に向って前傾している。

(3) 肥瘦係数の観点よりすれば、すでに就学前児童の体型変化にも学童や思春前期の者にみられるのと同じように发育転換期への早期接近の徴候が年次的に示されている。心的加速と身体的加速が無関係でない以上、分節性能力の前傾化を示す幼児に肥瘦係数値の前傾化がみられるということは当然であろう。

(4) 发育転換期は幼稚園児は4才7ヶ月、保育園児は4才9ヶ月であった。これは、ひとつに保育内容の相違、さらには母親という特定の保育者と接触している時間の長さの相違等によるものと解される。

(5) 分節性の発達と両親の最終学歴、兄弟間の順位等の間には連関がみられなかった。